

小特集

## Echoes of Elvis

—— グローバル・アイコンの軌跡

2015年はエルヴィス・プレスリー生誕80周年だった。

これを記念して、京都大学人文科学研究所/全国共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」は、同年10月24日、日米の三人の研究者とともに、アンスティチュ・フランセ京都（稲畑ホール）にて、国際シンポジウム「Echoes of Elvis —— グローバル・アイコンの軌跡」を催した。

米国を、いや世界を代表する前世紀最大の文化的アイコンとってよいエルヴィス・プレスリー（Elvis Presley, 1935-1977）が、音楽と映像の両分野にまたがる革新的なパフォーマンスで1950年代以後のポップ・カルチャーに与えた影響の大きさは、死後40年を経た今日でもなお、正確に測定することが容易ではない。といっても、それはけっして、エルヴィスを記念する場や、その思い出を伝達するとりくみ、あるいは、エルヴィスという「出来事」もしくは「現象」の本性やインパクトを捉えようとする真摯な試みが欠けているからではなく、むしろ反対に、それらが過剰なまでに継続され、反復され、ほとんど衰えることを知らぬように見えるから、いいかえれば、エルヴィスはいまも文字どおり現在進行形で語られる存在だからだ。

じっさい、今世紀に入ってからも、ジャンキーXLがリミックスしたエルヴィスの1968年のナンバー「おしゃべりはやめて（A Little Less Conversation）」が、ナイキの2002年サッカー・ワールドカップ広告キャンペーンに使用され、ヨーロッパ各国のヒットチャートで1位に駆けのぼれば、2010年にはシルク・ド・ソレイユがラスベガスで *Viva Elvis* と題されるスペクタクルをヒットさせ、2012年までロング・ランを続けた。本シンポジウムが開催された2015年には、コカコーラ・ボトル100周年を記念する公式イメージに、マリリン・モンローと並んでエルヴィスが起用され、日本の街角の自動販売機などでそれを目にした人も多いだろう。さらに、昨年4月に公開されたリザ・ジョンソン監督の映画 *Elvis & Nixon* が、合衆国司法省麻薬中毒者・危険薬物局のバッジを手に入れたいエルヴィスが時の大統領リチャード・ニクソンをホワイトハウスに訪ねた1970年の歴史的対面を、銀幕上に再現したことも記憶に新しい（このエピソードはすでに1997年にもアラン・アーカッシュ監督の手で映画化されている）。

このようにいまも私たちを捉えて放さないエルヴィスの魅力は、いったい何に存し、何に由

来するのだろうか。テネシー州の小都市メンフィスに文字どおり彗星のごとく現れ、瞬く間に全米を席捲したのち、一気にグローバルなアイコンへと飛躍した「エルヴィス」とは、いったい何だったのだろうか、そして何でいまもなおあり続けているのだろうか。本シンポジウムでは、20世紀アメリカ文学の専門家であり、ポピュラー音楽研究の分野でも活躍する放送大学教授・佐藤良明氏、ワシントン D.C. のナショナル・ポートレートギャラリーにて2010年に催された企画展 Echoes of Elvis のキュレーティングを担当した劇作家ウォーレン・ペリー氏、及び、美術史家で、ペンシルヴェニア大学芸術科学部で教鞭を執るターニャ・ヤング氏とともに、トランスナショナルな文化史 (cultural history) の観点からこれらの問いへのアプローチが試みられた。以下に続くのは、三氏の講演の内容である。

本誌掲載にあたり、三氏とも当日の講演原稿に——しばしば大幅に——加筆し、もともと豊かだったその内容をいっそう充実させてくれた。ペリー氏およびヤング氏の論考における註は、概ね著者による原註だが、若干ながら訳者が付した註も含まれている。しかし煩雑さを避けるため、原註・訳註の区別はあえて設けなかった。また、両論考の本文中、〔 〕内にポイントを落として表示された語句や文は、訳者による補註である。

本年、2017年は、エルヴィス・プレスリー逝去40周年にあたる。はからずもそのメモリアル・イヤーに組まれた本特集を、エルヴィスその人へのオマージュとして捧げたい。

(立木康介)